

「逢瀬は、プラットホームで。」

～ A tryst on the platform ～

< 序 章 >

椎名 美雪



【1】 早く大人になりたかった

自分の将来について考え始めたのは、多分、中学生のとき。

とりあえずは高校に進学するけど、「その先はどうしよう？」と思った。深い悩みではなく、まだ漠然としか考えられなかった頃。

そもそも、勉強が好きではなかったし、無理に高校より先に進んだところで、意味があるのだろうか？　そこで学んだ事は、「自分が生きていく上で、将来の役に立つのか？」と考えたとき、答えはNOでしかなかった。

専門的な職業に就く目標があるならば、それ相応の大学や、専門学校に行く必要がある。将来やりたい事や、夢といったビジョンがなくて、ダラダラと学生生活を送るのは、私の性格からは考えられない。

よく、「今は、将来のことが判らなくて当たり前。とりあえず進学して、そこで目標を見つければいい」――などという言葉聞いていたけれど、本当にそうなの？

もし、大学に進んだとして、そこで専攻した物とは無縁の会社に就職したら？　学んだ事が、知識が無駄になるのではないか。...まあ、経験して無駄な事は無いだろうけど、就職先で活かせる事は...多分、無い。

そんな状況になったら、私なら間違いなく、「何の意味があった？」と思うだろし、自分で選んだ進路を悔やむと思う。

とりあえず...な感じで、大学を卒業するのは、“就職に有利になるから”という考えの人が多い。

< 学 歴 社 会 >――そんな社会の風潮に背を向けた。

学歴なんて、意味がない。早く、自分の力でお金を稼ぎたい。大人になりたい。社会人になりたい！　自由になりたい！！　...そう強く思い、商業科のある高校に進学した。

大学にも、専門学校にも行かない。勉強じゃなくて、働きたい！！

世の中を、何処か冷めた目で見ていた。

私、椎名美雪（しいなみゆき）は、十六歳から、そんな思いを抱いていた。

【2】 就職活動

母校は、普通科と商業科がある高校。

進学する人は、普通科。就職を考えている人は、商業科。一一と、別れる。

当たり前だが、商業科には専門的な授業が多い。検定も頻繁にあるし、慣れないうちは目が回る。それこそ、「中学で学んだ事は、何だった!？」というような、社会に出る前の“予備校”みたいだ。

私にとって、授業の概念が大きく変わった場所だった。

*

<一九九一年>一一

三年生になると、「進路相談」がある。

商業科では、早い時期から、会社面接を想定しての練習が行われた。高校生というと、子供以上大人未満の、中途半端な年代。先生を相手にも友達感覚で、馴れ馴れしい口を利いていたし、それが普通だった。

「～です」、「～ます」口調だけなら、難なく出来る。馴れ馴れしく話したら失礼にあたる、目上の人と接する機会がない学生には、それ以上の事は難しかった。当然、敬語など使い慣れていないから、いざ話そうとしても、妙な口調になるのだ。

だから、若い頃の敬語というのは、本人が意識しない限り使いこなせないものだった。アルバイトなど、少しでも社会に触れる経験をすれば、話は別かもしれないが、やはり十代での敬語は難しい。

私はまだ、上手く話せた方らしいが、それでも何度も使い方を直された。面接官役は見慣れた先生なのに、真剣さを感じて緊張し、それが良い刺激となった。

*

本格的に就職活動を迎える頃には、職員室前の廊下一面が、貼り紙だらけになる。天井下から床上まで、壁の隙間がないくらいに、ビッシリと貼られた“求人票”。

まずは、志望する企業を見つけることから始まった。求人数は、数百社にもものぼる。

当時は、やや陰りが見え始めたが、まだ“売り手市場”。新卒者を求める企業が、多かった時代である。

放課後には、メモとペンを手に、何日も何日も、求人票と睨めっこをする日が続いた。

私には、就職先への拘りはない。

通勤時間は、1時間程度が理想...限度だろうか。というのも、通学時間に、それくらいをかけていたから。

あとは...我儘を言えば、土曜日曜の週休二日で、九時~十七時くらいの就業時間が良い。賃金も大切だが、高卒程度では限りがあるし、それに実家から通うから、そこはあまり気にしていなかった。

希望業種・職種も、これまた特にはなく...。「採用してくれた会社で、とにかく頑張る！」くらいの気持ちでいた。

そして、数社を選び、進路指導の先生へ相談。

企業が望む偏差値、最低限のラインがあり、その企業を希望する生徒数人が、“ふるい”にかけられる。

第一候補で選んだのは、業界では大手と言われる会社だった。選んだ本人の私は、全くの無知で、それさえも知らず一一。志望したことさえ無謀で、やはり...書類段階で、不合格。

落ちたのが校内選考でも、ショックなことには変わらない。さすがに少し凹んだが、諦めていられないのだ。

頭を早く切り替え、候補に挙げていたもう一社を用紙に記入し、提出した。

それが見事に、先生の目に留まった。

第二候補は、過去三年間に渡り、本校の生徒を採用しているとのこと。

「先輩が会社で頑張っているから、今年も募集が来たんだよ」

一一というような事を、先生が言っていた。

これは、もしかすると...? 良いかもしれない!?

僅かな希望の光が、見えたような気がした。

【3】 社会人の一歩手前

最終的に、私が内定を頂いたのは、「過去三年間、先輩が採用されている」という、電機メーカー。

“陵北電機”という、東京都内に本社を置く、社員数が三百人程度の、いわゆる中小企業。

入社式もつつがなく終え、新社会人は一ヶ月間、研修に明け暮れることになる。

*

長テーブルを“口の字”に並べた、広い会議室。私達、新入社員は、朝からこの会議室に詰められていた。

黒板を背にした、正面の席には、重役や先輩社員が座る。

部署紹介というものがあり、約三十分刻みで、部署毎の先輩社員が入れ替わりやってくるのだ

。

その度に配られる参考資料で、手元のバインダーが膨れ上がり、気付けば表紙が浮き上がるくらいの厚みになった。

私は、黒板を正面に見て、右側に座っていた。隣には、同じく高卒の“淳子ちゃん”という、小柄で温和そうな女の子。お互いに人見知りということもあり、なかなか打ち解けられなかったけれど、性格というか、タイプが何処となく似ているように感じて、心を許すようになった。

同期は、大卒・専卒・高卒を含めて、男性四人／女性十一人。しかし、入社式の直前に、女性一人が内定を辞退したことで、総勢十四人でのスタート。

この時はまだ、社会人の一歩さえ踏み出していないが、ほんの少しだけ社会というものを垣間見て、知ったような気持ちになっていた。

社会の厳しさ、本当の友情、そして恋…。

今後の人生を、大きく左右する出来事が、社会へ飛び出したばかりの私に襲いかかるとも知らずに。

大きなうねりが、気配を隠して近づく。

出逢いのカウントダウンが、始まっていた。

★ 「逢瀬は、プラットホームで。」 本編へ続く

あとがき

まずは... 素人の駄文で、大変恐縮です。(笑)
読んでくださり、本当にありがとうございます。

この物語は、二〇一二年七月～二〇一三年一月まで、アメーバブログ (Ameba) にて連載していた一部分で、私の実話を基にしたノンフィクションです。

<序章>では、時代背景が一九九一年と、とても古くて、現在と比べてみると、世の中が大きく動き流れたな...と感じます。

社会人になったのも、翌年の一九九二年ですから、まだまだアナログ時代。

ポケベルという、トレンドィー (死語ですね(笑)) な物が流行し、携帯電話は高嶺の花。...というより、一個人で持つような物ではありませんでした。

当時、二十歳以上だった方は、ご自分の青春時代を重ね合わせて、読んで頂けるのではないかと思います。

まだ生まれていない、まだ子供だった...という方は、「こんな時代だったんだ」と感じて頂けたら嬉しいです。

この後は、<本編>～<終章>へと続いています。

主人公が、会社で出会う人達との“人間模様”を軸にした物語です。

仕事に、恋に、大忙し。

一目惚れをした先輩は、一筋縄ではいかない人。「裏の顔」を持ち、翳を纏った人だった――

。

主人公目線での心情重視の物語ですが、興味を持って頂けましたら、是非読んでみてくださいね。

椎名 美雪

「逢瀬は、プラットフォームで。」 ～ 序章 ～

<http://p.booklog.jp/book/68704>

著者：椎名 美雪

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/glass-sculpture/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68704>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68704>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ